

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び

II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成

III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築

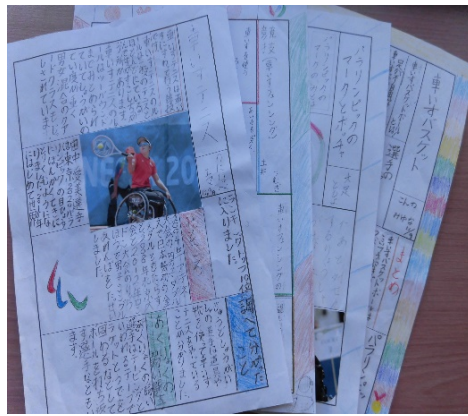
IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 茨城県 】

学校名【 取手市立取手小学校 】

1 実践テーマ	【 I・Ⅲ・V 】
2 実施対象者 (学年・人数)	3年65名(2クラス)、4年66名(2クラス) 5年74名(2クラス)、6年79名(2クラス)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (国語・道徳・学級活動・総合的な学習の時間) ② 行事名 () ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目 標 (ねらい)	・パラスポーツについて学習したり、現役パラアスリートと交流したりすることを通して、「障がい」を正しく理解するとともに、自分自身の生活を振り返り、目標や希望をもって努力しながら生きることの価値を見出すことができる。 ・パラスポーツ体験や手話体験、「グループワーク」の授業等を通して、他者を理解し、思いやりの心をもって接することの大切さや心地よさを味わい、コミュニケーション能力を高めることができる。
5 取組内容	(1) 国際パラリンピック委員会公認教材「I'm POSSIBLE」を活用しての授業（3～6年生全8クラス） ① パラリンピックってなんだろう？ ② パラリンピック競技の種目や競技を支える工夫を知ろう ③ パラリンピアン生き方から学ぼう   (2) 3年国語「パラリンピックについて調べよう」（東書）の授業における、まとめの新聞づくり（3年生） ・各自でテーマ（大会の意味、各競技種目、各パラリンピアンについて等）を決め、調べ学習の後、新聞にまとめる。 ※来校予定の山口凌河選手について調べている児童もいた。



(3) 「ボッチャクラブ」(今年度から新設したクラブ活動)の継続
(4～6年生11名、7月から月1回)



(4) 共生社会に向けた、他者理解と関わる力の素地を養うための
授業(4～6年生6クラス)

・「心を育てるグループワーク」(金子書房/茨城大学大学院教育
研究科教授 正保 春彦先生著)を活用した授業

<内容> ・聖徳太子ゲーム ・ウィンクキラーゲーム
・ジェスチャーゲーム(遊び、仕事)など



(5) パラスポーツアスリートを招いての講演会と体験授業

(5年生 ※3・4・6年は講演会のみオンラインで視聴)

講師：山口 凌河 選手(東京2020大会「ゴールボール」日
本代表候補/取手市出身)

- ① 講演内容「あきらめない力・理解する心」
 - ・パラリンピックへの道、夢 ・ゴールボール競技の説明
- ② ゴールボール体験
 - ・相互投球(4カ所に分かれ、交代で全児童)
 - ・アイマスク着用によるボールパス
(代表児童3人×2クラス)
 - ・山口選手に挑戦(守備のデモンストレーション)
(代表児童投球3人×2クラス+担任2人投球)
- ③ 事後学習
 - ・山口選手(視覚障がい者)へのお礼や応援の気持ちの届け
方を話し合い、実践する。



- (6) 「手話」体験の授業（5年生2クラス／総合的な学習の時間）
 講師：市社会福祉協議会の方々
 ・簡単なあいさつの仕方、意思の伝え方等



- (7) 「ボッチャ」体験の授業
 （5年生2クラス／総合的な学習の時間）
 ・1チーム3名（12チーム）での試合形式



- (8) 「東京 2020 オリンピック・パラリンピック」関連本コーナー
 の設置（図書室）と山口凌河選手の最新情報提供（クラス掲示）



6 主な成果	(1) パラリンピック競技種目について映像資料で学び、実際に体験する場を設けたことで、より競技への関心が高まった。また、障がい者スポーツの難しさを実感するとともに、障がい者の立場になって、補助する人やルール・場などを少し工夫すれば、障がいがあっても健常者と同じように競技を楽しむことも理解することができた。 (2) 現役のパラアスリートに来ていただき、体験を交えた講演会を実施した結果、その競技能力のすごさを実感することができた。さらに、障がいがあっても健常者と同様に目標や夢をもち、仲間や家族に支えられながら努力することに生きがいを感じていることを知り、そのすばらしさを理解するとともに、様々な目標に挑戦する意欲や困難に負けない勇気をもらうことができた。また、東京 2020 大会で実際にメダルを目指している市内出身の選手と交流できたことで、今後のパラスポーツ選手に対する関心や応援していく気持ちをもつことができた。 ＜アンケート結果＞ ○「お年寄りや障がいのある方と交流したいと思うか」に対して「思う」、「とても思う」の割合の合計 事前64.8% → 事後78.9% (3) 言葉や体を使って人とコミュニケーションをとったり、協力して課題をクリアしたりする「グループワーク」の授業を行うことで、恥ずかしがらずに自己表現したり他者を受け入れたりする喜びを感じることができ、人間関係づくりに役立った。 (4) 今年度から3年国語（東書）の教科書に、パラリンピックを扱う単元が登場したため、タイムリーで深い学びにつながった。
7 実践において工夫した点 (事業の特色)	(1) 今年度はコロナウイルス感染症拡大の影響により、思うように講師を招いての授業ができなかった。その分、校内で日々の教科・領域等の指導計画（カリキュラム）の中にオリ・パラ教育の視点を取り入れ、連携させることを意識した。 (2) 本校では、児童の「相手を思いやる心」や「コミュニケーション能力」、また「自己有用感」を育てていくことが課題として挙げられるため、「パラリンピック競技」や「互いを認め合い、支え合う心」に焦点をあて、自分の日常生活や今後の生き方を考えていくよい機会にしたいと考えた。 (3) 講師は、現役のパラアスリートにこだわって依頼をすることで、子供たちにとって東京 2020 大会がより身近に感じられるようにした。さらに継続して競技や人に注目し、応援していきけるよう、常に情報提供ができるように工夫をした。
8 主な課題等	(1) 講師を招く際は、ねらいに沿った学習ができるような人を探したり、講師と内容の事前打ち合わせを十分に行ったりするなどの配慮が必要である。 (2) 単発的な講演会だけに終わらせないよう、いかに学校教育のカリキュラムに位置付けていくかが課題である。
9 来年度以降の実施予定	(1) 総合的な学習の時間のテーマが「福祉」である5年生を中心に、今後も障がい者スポーツや福祉等について、体験を多く取り入れながら学ばせていきたい。また学んだことは広く情報を発信させ、全校そして保護者等にも広められるようにしたい。 (2) 講師の方々とは交流を続けながら、生きた教材としていきたい。